

私、履歴書

⑬

森 英 恵

「日本であらういっているのだから、危険を冒してアメリカに出ていくことではない」。ニューヨーク進出について友人たちは、みんな同じアドバイスをしてくれた。

米国進出に心揺れる

「気楽に」の夫の一言で決断

アメリカ旅行から帰国した一九六一年夏から、私はあれこれリサーチを始めていた。日本人がインターナ

創りあげていくにはまず、日本の暮らしの伝統の中で育った和服の素材を研究してみる。

表面効果のある鬼しほりのめんは美しいと思った。手ざわりの重厚さがリッチだ。西陣の帯地には華がある。藍(あじ)染めの浴衣地は肌ざわりがさっぱりして独特である。麗地を訪ね歩いてあれこれ素材を見、買い集めた。

「これだけ考え、リサーチをしてきたのだし、勇気だっているのだから、ダメでもよい」とこの一言でもらうということになった。具体的に動き出すと反対していた友人たちも力を貸してくれた。アメリカで服を作るのに一番大切なのはフィットよ。日本の洋服がアメリカで相手にされないのは、アメリカ人の体形に合わないから」。サンフランシスコで洋服学校をやっていたアメリカの友人のアドバイスはなにかと貴重だった。



和服地を使ったドレス(一九六五年のニューヨークコレクションから)

二年準備を続けていこううちに所がかかった。一月にニューヨークのトップデザイナーたちが、余米のマスコミを前にショーをやるプレスウィークというのがあり、毎年一人外国からゲストデザイナーを招くのである。会場はパーク・アベニューにあるホテル・デルモニコだった。

日本人らしさ
アメリカで仕事をしている日本人商社マン、立野建三さんは生活も習慣も意識もまるで違う。それを乗り越えるのは容易ではないよ」。またアメリカの友人は「日本からの服飾関係者がアメリカで成功した例はない。日本の服は悪くて安ものというイメージが出来上がってしまったている」と。壁の厚さを心配する親切な忠告がほとんどだった。

シヨナルな競争の激しいマーケットでデザイナーとしてやっていくには、はつきりとしたアイデンティティを持っていなければならぬ。欧米の後追いをしていたのでは注目されないだろう。

私は日本人。日本の女。外国のものとは異なった「なにか」を打ち出さねば……。日本製の布地を使って日本人の手で新しいファッションを

性記者からインタビューを受けたときだ。初め「ごめんなさい」

「和服のデザイナーとはばかり思っていた。ごめんなさい」

「やってみたらいい。やりたいというエネルギーが一番大切」夫がある日そう言った。

(ファッション・デザイナー)